



新課程教科書紹介特集 Part.2

新簿記 高校簿記

城西大学経営学部客員教授・NHK 高校講座「簿記」監修講師
 粕谷 和生

1. 教科書の特長

	 新簿記	 高校簿記
表現	図解・イラストを多用したわかりやすい表現	スピード学習向きのコンパクトな表現
構成	段階的に無理なく進むステップ構成	「取引の記帳と決算」を繰り返すサイクル構成
検定試験	全商簿記検定対策の決定版	日商簿記検定対策の決定版
共通点	慣行的な記帳方法の見直しを行い、特に仕訳帳の記入を簡略化して学習者の負担を軽減。	

2. 新課程に向けた工夫

(1) 新簿記

①対話形式の説明文

第1編「簿記の基礎」は、抽象的な簿記の基礎概念を扱うため簿記の授業の中では、指導が難しいところです。なかでも、経営活動（取引）によって資産・負債・資本が変動することや、収益・費用が資本を増加または減少させる原因であることを具体的に・体験的に指導することには、毎回苦勞するところです。

そこで今回工夫したのは、『対話による抽象概念の解説』です。先生と生徒または生徒同士が一つのテーマを対話によって掘り下げていく流れで、生徒側の自然な疑問や視点で理解できるようになっています。これまでも易しい文章や図解などで丁寧に解説してきましたが、今回の対話形式による説明文は、これまで以上に無理なく抽象概念をマスターできるようになっています。また、この方法は巻末の「ADVANCE」にも採用し、考えさせる高度な内容を楽しく容易に学習できるようになっています。

②決算振替手続きの図解

初めて学習する「決算」（第9章）において、生徒及び教師の前に立ちはだかる大きな壁は、『総勘定元帳の締め切り』です。この最重要ポイントは、

振替仕訳を行って勘定を締め切るか、それをやらずに直接締め切るかです。前者が収益・費用の勘定で、後者が資産・負債・資本の勘定です。そこで見開きページを使い、上下2区分で前者を上段に、後者を下段に配置して、全体の流れを容易に理解できるように図解しました。（教科書 p.64-65）

さらに1ページを使って、ジュースのコップで「振り替え」の特別講義を設けました。ここはNHK高校講座Eテレの映像では、ポンプを使って説明していますが、教科書では動画映像と同じ効果を出すためにジュースを入れたコップで「振り替え」を説明しています。一度読んだだけで、「振り替え」を完璧に理解できます。

③日商簿記検定の新しい出題項目に対応

クレジット売掛金や電子記録債権・債務など日商簿記検定の新しい分野は、発展学習編で扱っています。独立した章を設けてしっかりと解説していますので、『進みの早い生徒の独習』も可能です。

特に、クレジット売掛金の仕組みや電子債権記録機関を介する電子記録債権・債務の「発生」・「消滅」・「譲渡」の仕組みを、すべてイラストを用いて解説しています。ここまで徹底した図解は、ほかにはありません。無理なく楽しみながら新しい出題分野を学習できます。

(2) 高校簿記

①格調高いわかりやすい表現

本書は、日商簿記検定対策決定版と言われますが、市販の受験テキストがよく使う要点だけのブロック表現やくだけた言い方は、一切用いていません。学問的論理性を重視しつつ、それでいてコンパクトでわかりやすい文章に仕立ててあります。伝統的な教科書のスタイルを堅持した、格調高くもわかりやすい表現を心掛けました。

②日商簿記検定の新傾向はすべてカバー

日商簿記検定の新傾向(新しい出題項目・新しい出題形式など)は、すべて取り扱っています。教科書で『Let's Try』と銘打ってあるページが、それです。

なかでも、第17章の『月次決算による処理』では、毎月末に計上する減価償却費と会計期末に計上する減価償却費の取り扱いについて図解しています。また、大きく変更になった本支店会計については、「支店会計の独立は、支店の業績を明確に把握することが目的」という論点を再確認して、例題を新しくしました。本書の特長である『本支店合併精算表』は今回も引き継ぎ、連結財務諸表の学習にスムーズに繋がるようにしてあります。

なお、「Let's Try」は、学習の進度にあわせてタイムリーに配置してありますので、学習の流れの中で無理なく容易に理解が可能です。

③高品質で難易度の高い総合学習

主体的な深い学びを目指す巻末の「総合学習」では、高品質で難易度の高い課題が用意されています。これまでの簿記の書物には見られない内容ですが、**検定問題の解き方ばかりに目を奪われがちな生徒には新鮮に感じるに違いありません。**

たとえば、「与えられた条件での商品の仕入れ、販売を考えてみよう」(教科書 p.290)では、仕訳や勘定記入などは出てきませんが、簿記で学んだことの活用範囲の広さに生徒たちは感動するはずです。

また、「取引を推定してみよう」(教科書 p.291)では、個人 → グループ → クラス全体のそれぞれの段階で推定した取引を発表するため、思いもよらない取引が出てきて、びっくりするはずです。

④会計ソフトウェアは標準的な内容

新課程に入ってきた「会計ソフトウェア」については、手書き簿記の学習をもとに、標準的な基礎・基本の内容を取り扱っています。しかも、個人企業を前提とした会計ソフトを用い、帳簿などの様式が教科書に掲載されているものと会計ソフトの画面に出てくるもので、大きく乖離することのないように配慮しました。

その結果、手書き簿記を前提とした教科書をしっかり学習していれば、すんなりと「会計ソフトウェア」の学習に入っていけるということがわかります。どんなに会計ソフトが進化しても教科書の学習がいかに重要かということ、生徒は再認識するでしょう。

また、一方で「会計ソフトウェア」に指導の重点を置きたい学校に対しては、充実した実習用の課題を巻末に用意してあります。環境設定から開始残高の登録、取引の仕訳データ入力、試算表の作成、決算整理仕訳の入力を経て損益計算書と貸借対照表の作成など、会計ソフトに関する一巡の手続きが実習できるようにしてあります。(教科書 p.294-297)

3. 先生方へのメッセージ

新簿記の代表著者は一橋大学名誉教授の安藤英義先生、高校簿記の代表著者は早稲田大学名誉教授の大塚宗春先生と早稲田大学教授の川村義則先生です。代表著者というのは、監修者と異なり、とても深く教科書の作成にかかわります。

著者ですから原稿を書くことはもちろんのこと、編修会議のすべてに出席し、教科書原稿の隅から隅まで読み込み、膨大な意見や指摘などを行います。大学教授ですので、日本会計研究学会や日本簿記学会など、多くの学会の議論を踏まえ、極めてバランスのよい方向性を示してください。

その結果、実教の簿記の教科書は、学問的に最も信頼性が高く、品格を備えた教科書となっております。

先生方の学校で、新簿記・高校簿記が簿記教育の一助となることを、執筆者一同心から願っています。